



巻 頭 言

情報化時代の「情報の質」

財団法人 日本植物調節剤研究協会 会長 千坂 英雄

情報化時代といわれて久しい。情報伝達のメディアの発達にも目覚ましいものがある。インターネット上では座ったままマウスを押せば、関連する情報を含めて簡単に情報が集まってくる。何とも便利な世の中になった。しかし、こうした情報化時代にバラ色の未来を描く前に、人間の生態、心との関係で論議すべきテーマがたくさんあり、そのひとつに「情報の質」ということがあるように思える。自分の欲しい情報が入っているかどうかという質のことではなく、情報の内容の信頼性、ウソかホントかという意味の質のことである。

社会・経済の世界では、たとえウソの情報でも実効を持つ。例えば、ある会社がエイズウイルスのワクチン開発に成功したという情報が流れたとする。それがウソであってもその会社の株は上がり、そして得した人、損した人が出てくる。いいかわるいかは別として、ウソの情報でも現実を動かす実効を持つということである。では、私どもが主な仕事の間としている試験研究、技術開発の世界ではどうか。

かつて、情報を集めるにはかなりのエネルギーがいった。図書館へ行って文献を捜す。今のよう簡単にコピーできるわけではないから字引き片手に通読して要点をメモする。原文を手元に置こうとすれば、フィルムに収めて印画紙に焼きつける。その論文の引用文献の中にこれと思われるめばしいものがあれば、その文献の載っている雑誌がどこの図書館にあるか調べてそこへ読みに行く。こんな状況下では集める情報の量にはおのずから限度がある。当然、探す文献、情報は自分に興味のある範囲、つまり専門の領域に限定される。論文の質にはいろいろ

ある。目からうろこが落ちるようないいものもあるし、吟味不足でとるに足らないものもある。一般的に言えば自分の専門の領域のことだからそれなりに評価力、批判力があるわけで、いいかげんなことをいっている論文は無視すればよく、それができた。つまり、このような時代には、質のわるいウソの情報は、もちろん薬にはならないが毒にもならなかった。

時代とともに専門分化が進み、一方ではそのブレイクスルーを求めて学際的交流が展開する。情報化がこれを加速し、専門ではない研究領域の関連した情報が楽に手に入るようになった。たいへん大事なことである。そして同時に、必ずしも十分批判力を持ち得ない範囲の情報を自分に都合がよければつまみ食いの的にどんどん使い、新しい情報を生産するということが起こる。もし利用した情報にウソが入り込んでいたらどうなるか。それを使って生み出した新しい情報もまたウソである。このような悪しき循環に入り込むと、砂の上に楼閣を築くように、研究技術者は無駄にエネルギーを使い、虚構の中で自己満足することで終る。つまり、情報化・学際化の時代、吟味不足のいいかげんなウソの情報は毒である。

いささか短絡した表現になってしまったが、いずれにしろ情報の受信者には十分な批判力が、また発信者には情報の適用限界を含めた十分な吟味力が求められる。その力の培養の仕組みをどうするか大きな問題だが、いかに情報化時代とはいえ、受信者・発信者相互の信頼関係という人間臭さからは逃れられないような気がする。